

岸本遺跡（第2・3次）発掘調査報告

—三重県松阪市飯高町森所在—

2008（平成20）年3月

三重県埋蔵文化財センター



調査区全景（上空南から）

序

三重県の中央部を流れる櫛田川は、高見崎に端を発し、松阪市域を横断して伊勢湾に流れ込んでいます。川沿いには、古くからの人々の生活の痕跡が残され、奈良県側との川を伝った交流が想定されています。岸本遺跡は、櫛田川上流左岸に位置する遺跡です。近くには、中世に遡ると考えられる和歌山街道も通っており、この地域が古くから開けていたことがうかがえます。

今回の発掘調査は、県道蓮峠線の整備に伴って行われたもので、開発に伴う緊急調査です。我々が現代社会をより豊かに暮らすためには、開発は必要不可欠なものです。その一方で地域の歴史を語る遺跡が失われていくにあたり、これらを記録保存し、後世に伝えていくのも我々の使命であると考えております。今後は、こうして蓄積された成果をより多くの人々に有効に活用されるように努力していきたいと考えております。

なお、最後になりましたが、調査にあたりましては地元の方々をはじめ、松阪市教育委員会、三重県県土整備部の方々には多大なるご理解とご協力を賜りましたことに厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

三重県埋蔵文化財センター
所長 吉水康夫

例　　言

1. 本書は、三重県松阪市飯高町森に所在する、岸本遺跡の第2・3次発掘調査報告書である。
2. 調査の原因是、平成17・18年度の県道連峠線道路改築事業である。当該調査にかかる費用は、三重県県土整備部が負担した。
3. 当該調査及び整理体制は下記のとおりである。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター
	平成17年度　調査研究Ⅰグループ　技師　西村美幸
	平成18年度　調査研究Ⅰ課　主査　小濱　学
整理担当	三重県埋蔵文化財センター
	調査研究Ⅰ課・情報普及課・支援研究課
	発掘調査業務委託先　平成17年度　安西工業株式会社（調査委託）
	平成18年度　株式会社シン技術コンサル（調査補助員委託）
4. 調査期間は下記のとおりである。

第2次調査	平成17年6月1日～平成17年8月9日	760m ²
第3次調査	平成18年6月28日～平成18年10月5日	969m ²
5. 調査にあたっては、地元の方々、松阪市教育委員会、三重県県土整備部道路整備室、及び松阪建設事務所からのご協力を得た。
6. 報告書の執筆は西村、小濱、小林俊之が、全体の編集は西村が行い、文末に氏名を明示して文責を示した。遺物写真撮影は長谷川哲也・山本達也が行なった。
7. 本書で報告した記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

凡　　例

<地図類>

- 1 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、県道連絡線道路改築事業及び平成12年度実施の中山間地域総合整備事業の工事図面である。工事図面類は、国土地理院による座標第IV系（旧国土地標）で表現されているものであるため、平成14年4月から施行されている世界測地系・測地成果2000には対応していない。
- 2 採団の方位は、世界測地系・測地成果2000による座標北で表している。なお、この地域の磁北は真北に対して6°50'西偏している。（平成15年国土地理院）

<遺構類>

- 1 土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（第14版1994年）を用いた。
- 2 本書で使用した遺構表示略号は下記のとおりである。

SK：土坑 SD：溝 SE：井戸 P i t · P：柱穴・小穴

- 3 遺構の「掘形」とは、例えば当初柱を据えるため掘削した穴のラインを指す。

<遺物類>

- 1 当報告での遺物実測図類は実物の1/4を基本としている。
- 2 遺物実測図は、当報告書を通じて通番としている。
- 3 当報告書での用語は、「つき」は「杯」、「わん」は「碗」に統一している。
- 4 出土遺物観察表は、以下の要領で記載している。

番号 出土遺物実測図掲載番号である。

実測番号 実測段階の登録番号である。

様・質 「縄文土器」「土師器」などの区分をここに示した。

器種など 遺物の器種を示した。

次数 「2次」及び「3次」は、それぞれ第2次調査、第3次調査出土遺物を示す。

グリッド 調査時に設定したグリッド名を記した。

遺構・層名等 遺物の出土した遺構や層名などを記した。

法量（cm） 遺物の法量を示す。（口）は口縁部径、（底）は底部径、（台）は高台部径、（頸）は頸部径、（受部）は受部径、（高）は器高を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での接地点ではない。

調整・技法の特徴 主な特徴を示した。「A→B」はAの後にBが施されたことを示す。

胎土 小石などの混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

色調 その遺物の代表となる色調を記載した。表記は前掲『新版標準土色帖』に拠る。

残存度 その部位を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分を示す。

特記事項 遺物の特徴となる事項を記した。

<写真図版>

- 1 写真図版は、遺構・遺物毎でまとめた。
- 2 出土遺物実測図と写真図版の遺物番号は対応している。
- 3 遺物の写真図版は、縮尺不同である。

本文目次

第1章 前 言	
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査の方法	1
第2章 位置と環境	4
第3章 遺 構	
第1節 基本解説	6
第2節 遺構の概要	6
第4章 遺 物	
第1節 遺構出土の遺物	13
第2節 包含層等出土遺物	14
第5章 岸本遺跡の自然科学分析	17
第6章 調査のまとめ	
第1節 織文時代及び弥生時代の状況	21
第2節 中世土坑群の分析	21
第3節 岸本遺跡の位置づけ	22

図版目次

第1図	調査区位置図	3
第2図	遺跡位置図	5
第3図	下層調査の土層断面図	6
第4図	S.K15平面図・断面図	8
第5図	S.K13・27・28・29平面図・断面図	10
第6図	S.K18・19・20・31・22～26平面図・断面図	11
第7図	S.K35・S.E34平面図・断面図	12
第8図	出土遺物実測図	15
第9図	試料採取位置とリン・カルシウム分析結果	19
第10図	土坑群の規模	22
第11図	S.K13内出土石材	22
附図	調査区全図・土層断面図	

表 目 次

第1表	範囲確認調査結果一覧	2
第2表	遺構一覧表	9
第3表	出土遺物観察表	16
第4表	土壤理化学分析結果	20

写 真 図 版 目 次

卷頭図版 調査区全景

写真図版 1	第2次調査調査前風景、第3次調査調査前風景	25
写真図版 2	第2次調査区全景、第3次調査区全景	26
写真図版 3	S K15、S K13	27
写真図版 4	S K27~29、S K27	28
写真図版 5	S K28、S K29	29
写真図版 6	調査区中央土坑群	30
写真図版 7	S K35、S E34	31
写真図版 8	調査作業風景、調査成果説明会風景	32
写真図版 9	工事中風景	33
写真図版10	出土遺物（1）	34
写真図版11	出土遺物（2）	35
写真図版12	出土遺物（3）	36

第1章 前 言

第1節 調査に至る経緯と経過

1 調査に至る経緯

岸本遺跡は、旧飯南郡飯高町の遺跡地図で33番として登録され、平成18年に松阪市に合併した際に旧飯高町の整理番号eが付されてe33番となった。

当遺跡は、昭和59年度に実施された畜産経営環境整備事業に先がけて、掘削される部分400m²を対象に、9月10日～同11日に発掘調査が行なわれた。この調査（以下「第1次調査」とする）の結果、平安時代末から鎌倉時代にかけての掘立柱建物1棟、室町時代後半の土坑2基が確認された。遺物はこの時代のものと共に繩文・弥生時代のものが出土した。

その後、平成12年に中山間地域総合整備事業が行われた際、耕作土の除去された水田面から遺物が確認されたため、飯高町が38箇所の調査坑をもうけて範囲確認調査を行った。その結果、繩文時代の遺物や炉穴を伴った竪穴住居と考えられる遺構、弥生時代の遺物、中世の遺物などを確認した。

平成15年度に、岸本遺跡を継続する、一般地方道蓮峠線の道路改事業の計画書が提出され、県教育委員会および三重県埋蔵文化財センターでは、遺跡の保存を巡って県土整備部と協議を行った。その結果、当該箇所については、発掘調査後に記録保存として対応することになった。

これを受け、三重県埋蔵文化財センターでは、平成17年3月18日、29日及び平成18年3月3日に事業対象地11,400m²の範囲確認調査を実施した。その結果、第1次調査の南部分2,000m²に繩文時代及び平安時代の遺物や遺構を確認し、要調査範囲を確定した。（第1図参照）

2 調査経過

本調査は、平成17～19年度に行った。うち、今回の報告書の対象となるのは、平成17・18年度分である。平成17年度は、安西工業株式会社による調査委託、平成18年度は、株式会社シン技術コンサルによる調査補助員委託で調査を行った。

平成17年度調査の事業委託期間は、6月1日～8月19日であった。現地調査は6月21日から開始し、8月8日に終了した。途中、7月23日（土）に、地元住民を対象に調査成果の説明会を開催して、25名の参加者を得た。

平成18年度調査の事業委託期間は、6月28日～10月5日であった。現地調査は、7月18日から開始し、9月29日に終了した。途中、9月5日に、地元飯高中学校生徒の見学を受けた。

3 文化財保護法にかかる諸通知

文化財保護法等にかかる諸通知は、以下により県教育長宛に行っている。

・文化財保護法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（県教育長宛）

平成17年5月31日付け松建第168号

平成18年4月26日付け松建第136号

・文化財保護法第99条の第1項（県教育長宛）

平成17年6月1日 教理第85号

平成18年6月29日 教理第157号

・遺失物法による文化財発見・届出通知
(松阪警察署長宛)

平成17年8月17日 教委第12-4-18号

平成19年2月27日 教委第12-4-36号

第2節 調査の方法

調査区の設定 調査範囲（調査区）内の任意の2点を結ぶ線を基準線とし、それにしたがって4m×4mの方眼（グリッド）を設定し、調査の基本単位とした。グリッド名の表記は、第2次調査は、南西隅、第3次調査は北西隅を表示の原点とした。このため、

1つのグリッドで2つのグリッド名を持つ場所がある。その後、遺構実測の段階で、国土座標（新座標）を付与し、調査区全体の位置関係を座標で把握できるようにした。

表土除去 包含層より上位は、重機（バックフォー）

による表土除去を実施した。最近のものと考えられる擾乱坑も、場所によっては、バックフォーによつて掘削を行つた。

検出・掘削 表土除去後、人力による遺物包含層掘削を実施し、その後、遺構検出・遺構掘削を行つた。

遺構略図 遺構検出時、遺構が確認された場合には、グリッド単位で1/40の遺構略図を記録した。ここには、土質・切り合いを記したほか、遺物取り上げにおける遺構番号の台帳としても使用した。

遺構番号の付与 遺構番号付与は、小穴以外は遺構種別を超えた通し番号とした。第1次調査では、3番まで遺構番号が使われており、第2次調査ではこれららの番号を外す予定であったが、謝って3番からスタートし、第1次調査の番号と重複してしまつた。

このため、報告書作成時に3番の番号を一番新しい39番に変更した。これについては、遺構一覧表に旧名称を併記し、明示した。

小穴の番号については、第2次調査では、遺物の出土した小穴のみを対象とし、グリッドごとに通し番号を付与した。第3次調査では、グリッドを超えて、全ての小穴に通し番号を付与した。また、遺物の出土した小穴の番号の後ろに、遺物の出土していない小穴についても番号を付与した。

実測 調査区の土層断面図は、第2次調査では、縦1/20・横1/100、第3次調査では縦横共に1/20縮尺で

実測を行つた。報告書に掲載した調査区の土層断面図は、倍率及び縦横比率を修正して合成したものである。遺物出土状況や個別遺構の実測図は1/10縮尺で実測を行つた。調査区全体の遺構実測も手描きとし、1/20縮尺の作図とした。

遺構写真撮影 基本的に4×5インチ判の白黒ネガ・カラーリバーサルフィルムで撮影し、補助・メモ的に6×9プロニー判と35mm判の白黒ネガおよびカラーリバーサルフィルムも使用した。航空撮影には、6×6プロニー判フィルムも使用した。

遺物写真撮影 報告書掲載遺物から任意に選択し、プロニー判白黒ネガフィルムで撮影した。

(西村美幸)

【註】

- ① 三重県教育委員会「日本遺跡」『昭和59年度県営整備事業地埋蔵文化財発掘調査報告』1985年
- ② 三重県埋蔵文化財センター『平成12年度三重県埋蔵文化財年報』2001年、及び、飯高町教育委員会の範囲確認調査結果による。
- ③ 調査位置図は、本来は最新の工事図面などをもとに作成している。しかし、今回は遺跡範囲の理解のために、は場整備前の地形図が必要であったため、は場整備前地形図をベースに、は場整備完了後の地形図を破線で、今回の道路計画線を太線で合成して作成した。

実測 調査区の土層断面図は、第2次調査では、縦

1/20・横1/100、第3次調査では縦横共に1/20縮尺で

調査年度	調査位置番号	遺構	遺物	調査年度	調査位置番号	遺構	遺物	調査年度	調査位置番号	遺構	遺物
H16	1	柱穴?	—	H12	1	未辨証	縄文土器	H12	21	柱穴、焼石	縄文土器手取手裏出土 (北台川日式井行)
H16	2	—	縄文土器・土師器 裏(平安後期)	H12	2	—	縄文土器	H12	22	—	縄文土器
H16	3	—	縄文土器	H12	3	—	縄文土器	H12	23	—	縄文土器
H16	4	溝?	—	H12	4	未辨証	縄文土器、石器剥片	H12	24	?	?
H16	5	—	縄文土器	H12	5	—	縄文土器、中世土器	H12	25	—	縄文土器
H16	6	—	—	H12	6	—	—	H12	26	明治時代石役作跡	近世陶器
H16	7	—	—	H12	7	柱穴	縄文土器、焼石	H12	27	—	縄文土器・弥生土器
H16	8	—	—	H12	8	柱穴	縄文土器	H12	28	—	縄文土器
H16	9	—	—	H12	9	—	縄文土器	H12	29	中世土坑	縄文土器、打制石器、削片、 弥生土器、中世土器
H16	10	—	—	H12	10	柱穴	縄文土器、中世土器、石片、石包丁	H12	30	—	縄文土器
H16	11	—	—	H12	11	—	縄文土器(粗製深鉢)	H12	31	柱穴	縄文土器
H17	12	—	—	H12	12	—	縄文土器	H12	32	—	縄文土器
H17	13	—	—	H12	13	卯骨持手住 底、柱穴	縄文土器	H12	33	—	縄文土器
H17	14	—	—	H12	14	—	縄文土器	H12	34	—	中世土器
H17	15	—	—	H12	15	—	縄文土器	H12	35	—	—
H17	16	—	—	H12	16	—	—	H12	36	—	—
H17	17	—	—	H12	17	—	縄文土器	H12	37	—	—
H17	18	—	—	H12	18	未辨証	縄文土器	H12	38	—	—
H17	19	—	—	H12	19	—	縄文土器				
H17	20	—	—	H12	20	断面・焼石 縄文土器、注口土器 [しきを右あり]	—				

*H12年度の内容は、飯高町教育委員会の範囲確認調査結果を一部変更して作成した

第1表 範囲確認調査結果一覧



第2章 位置と環境

1 地理的環境

岸本遺跡(1)は、松阪市飯高町森字岸本に位置する。立地は櫛田川上流の河岸段丘上の小丘状地で、標高は約220mである。

櫛田川は三重県内で有数の河川であり、上流・中流では中央構造線に沿って東流し、下流では北流して伊勢湾に注ぐ。岸本遺跡は櫛田川の上流域にあり、北には高見山地、西側から南側には大台山系の山々がせまっている。遺跡の西方約10km地点で高見峠に達し、その向こうは奈良県吉野である。

この櫛田川上流域である飯南町粥見～高見峠は、通称「川俣谷(かばだに)」と呼ばれる。この地域一帯は、近世の和歌山街道が通り、それ以前にもルートはあった可能性が高い。源義經にまつわる伝承もあり、この地に高見峠が大きく述べていていたことがわかる。

2 歴史的環境

岸本遺跡の周辺では岸本遺跡以外には発掘調査されている遺跡はなく、各々の遺跡は詳細が不明である。表記資料や地表面観察等の限られた資料から環境を見てみよう。

(1) 岸本遺跡

岸本遺跡の第1次調査は、昭和59年度に畜産經營環境整備事業に伴い、400m²が調査された。調査では、平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物1棟、室町時代の土坑が検出されている。遺物では、繩文土器のかずら生時代中期の壺も出土しており、繩文時代～中世後期に及ぶ遺跡であることがわかっている。また、山茶碗とともに瓦器の出土があり、大和との国境に近い状況がよくわかる。

(2) 周辺の遺跡

縄文時代 岸本遺跡で縄文土器が出土しているほかは、資料が多く、詳細はよくわかっていない。ただし、櫛田川のやや下流にある飯高町赤桶の宮ノ東遺跡では中津式、元住吉山Ⅱ式、宮滝式の土器と石鏃、剥片が出土しており、岸本遺跡周辺でも今後の資料の増加が期待できる。

弥生時代 前期の弥生土器の出土が見られる遺跡

に込垣内遺跡(旧称牧口遺跡)(2)が挙げられる。山間部での前期土器の出土は注目できる。中期では岸本遺跡、上り遺跡(3)、牧口A遺跡(4)が挙げられる。込垣内遺跡では、後期と推定される土器片も採集されている。このように大字七日市～岸本遺跡の盆地では、弥生文化の定着が見られる。

このほか時期は不明であるが、石器のみ採集されている遺跡に谷塙遺跡(5)がある。

古墳時代～古代 現在のところ、この周辺での古墳時代の遺跡は確認されていないが、今後確認される可能性はある。古代においても遺跡は確認されていないが、「太神宮諸難事記」延久元年(1069)7月20日条に「河俣山」が見られ、平安時代中期にはこの地域のなんらかの痕跡を確認することができる。

中世 岸本遺跡の周辺では、寺のまへ遺跡(6)で中世の遺物が表採され、谷野遺跡(7)で範囲確認調査により、中世と思われる小穴群が確認されている。また、上り遺跡では瓦器や青磁の表採があり、込垣内遺跡や牧口A遺跡、牧口B遺跡(8)、栗野遺跡(9)では中世と思われる土器器の小片も採集されている。また、「神鳳鷹」には「富永御蔵」が見られ、今の富永あたりにあったものと考えられる。これらのことから、鎌倉～南北朝時代には、富永から岸本遺跡にかけての範囲で集落の存在が窺えよう。

(3) 川俣谷と中世城館

前述のように、岸本遺跡周辺は川俣谷と呼ばれ、この谷には多くの中世城館が存在する。近隣だけで木森城跡(10)、谷野城跡(11)、七日市城跡(12)、富永城跡(13)、福本城跡(14)、九曲城跡(15)がある。

伊勢国司北畠氏滅亡後の天正5年(1577)北畠具教の弟具親は、北畠家再興のために挙兵したと伝えられる。その際、川俣谷の諸侍は具親に味方している。結果は織田方に敗れ、この辺りの城館はその際に落城したと伝えられている。ただし、七日市城跡は具親挙兵時に織田方にについた日置大膳亮が、織田信雄より当地を与えられた際に築いたとの伝承がある。

近隣の城館のうち森城跡、谷野城跡は岸本遺跡と非常に近い。谷野城跡は岸本遺跡対岸の愛宕社が建

つ場所があり、8m×8mの台状地に土塁、堀が確認できる。森城跡は具親挙兵時の一拠点と伝えられ、道路建設時に既に大半が消滅しているが、10m×20mの台状地に幅7~8m、深さ約3mの堀切を確認することができる。

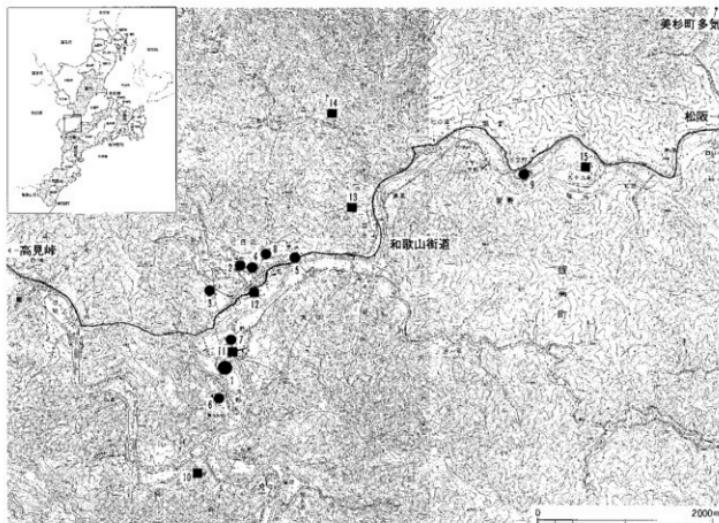
この川俣谷は、飯高町滝野地区から北へ峠を越えると、北畠氏の本拠多気(津市美杉町多気)に着く。西の高見峠を越えると大和国吉野である。また櫛田川を東へ下ると、大河内・坂内等の北畠氏にとっての重要な地がある。これらのことから、北畠氏にとって川俣谷は重要な地点であったと考えられる。

(小林俊之)

[註]

- ① 久保良任「川俣谷における源平の戦史と伝承」(『飯高町郷土誌』飯高町、1986年)。これによると古野を出て平泉に向う途中に当地近辺を通ったという可能性を挙げている。
- ② 三重県教育委員会「岸本遺跡」(昭和59年度県営圃場整備事業地域文化財発掘調査報告書)1985年
- ③ 奥義次「宮ノ東遺跡」(『三重県史』資料編 考古1、三重県、2001年)

- ④ 奥義次「原始」(『飯高町郷土誌』飯高町、1986年)。以下、各遺跡の状況はこの文献に據る。
- ⑤ 『太神宮諸難事記』(『群書解題』一上)。
- ⑥ 寺のまへ遺跡は、平成18年度の松阪市による詳細分布調査で確認された。
- ⑦ 谷野遺跡は、昭和63年度に県営は場整備事業に先立つて行われた範囲確認調査で遺構・遺物が確認された遺跡で、平成17・19年度の県道蓮続線道路改築事業にかかる範囲確認調査でも遺構・遺物が確認されている。
- ⑧ 『神風鈴』(『群書類從』神祇部)。
- ⑨ 『勢州四家記』『勢州軍記』(『群書解題』一三)。
- ⑩ 安岡義毅『勢陽五鈴遺書』(天保4年(1833)成立 三重県郷土資料叢書第76集 三重県郷土資料刊行会、1972年)。
- ⑪ 前掲⑨文献。
- ⑫ 前掲⑨文献。
- ⑬ 森城跡・谷野城跡の現状については、山本浩之「防御バーツの組み合わせによる城郭構造の分類(上)―南伊勢の諸城を中心として―」(『中世城郭研究』第16号、中世城郭研究会、2003年)や成瀬匡章「森城跡の調査」(『伊勢の中世』第69号、2002年)を参照した。



第2図 遺跡位置図(1:50,000) [国土地理院「七日市」「普野」「宮前」「江馬」1:25,000より作成]

第3章 遺構

第1節 基本層序

岸本遺跡は、水田や畑などに利用されており、調査前の地表は、北から南にかけて緩やかに低くなっていた。調査区西壁で第2・3次調査をとおしての土層を記録した。(附図参照)

基本層序は、I 表土（1層）、II 包含層（堆積順は

基本層序

上から15層→19層→調査区北側では30層、調査区中央より南では18層→13層→2層→3層、III遺構検出面（調査区北側では23層、9~20列にかけては、14層、調査区南側では4層の、それそれ上面）となっている。

第2節 遺構の概要

今回の第2・3次調査では、土坑、溝及び多くの小穴を確認した。土坑の中には、墓壙と考えられるものもある。小穴は、調査区の中央付近に集中する。掘立柱建物としてのまとまりがあるかどうか検討したが、建物としてとらえることはできなかった。以下、主な遺構について概述するが、数値等は遺構一覧表を参照されたい。

1 繩文時代の遺構

調査区南東隅で4基の土坑を確認し、調査区中央東端では、縄文時代の遺物を含むピット数個を確認した。また、包含層等からの縄文時代遺物の出土はグリッド6以南に集中している。

包含層出土の縄文土器は、検出面付近から出土した。このため、下層に縄文時代の遺構が存在するかどうかを、重機によってトレンチ状の下層確認調査を行ったが、遺構・遺物は確認されず、下層は存在しないことがわかった。

遺構の概要

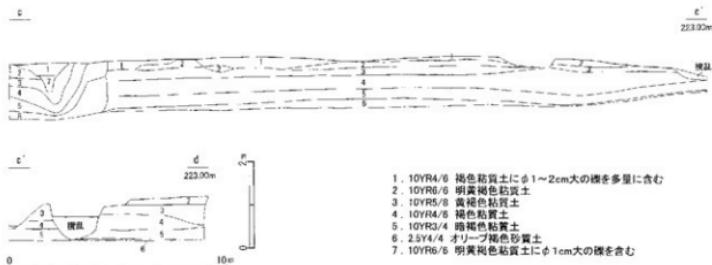
SK7・8 SK7は長円形、SK8は不整形で、切り合い関係からSK8が新しいと判断した。いずれも輪郭が不鮮明で、自然地形の落ち込みである可能性も考えられる。

SK9・10 いずれも不整形で、切り合い関係からSK9が新しいと判断した。また、輪郭が不鮮明で、自然地形の落ち込みである可能性も考えられる。

2 古代の遺構

古代の遺構は、調査区北部のSD14付近を中心にお分布している。

SD14・16 SD14は、幅約0.5mの溝で、方位は、S $56^{\circ}30' E$ 、調査区西端付近で南(S $25.5' W$)に曲がる。東西方向については、中央部のみ完掘した。屈曲部には擾乱がある。奈良～平安時代の土師器甕・高杯が出土した。SD16からは遺物が出土していないが、方向などからSD14の続きの溝である可能性がある。



第3図 下層調査の土層断面図(縮尺1:100、横尺1:200)

SK5 土師器の小片と炭が出土したが、不整形で底の深さも一定しておらず、木の根などである可能性が高い。

SK15 長円形の土坑で、長軸方位は、S56°Eである。西北端付近で、切っ先を外側に向けた鉄繩1点が出土した。この他、平安後期の甕と考えられる土師器片が出土している。埋土の自然科学分析（リン・カルシウム分析）では、積極的に証明できないが、墓壙である可能性も考えられる。

SK21 長円形の土坑である。中世の土坑SK17に切られている。平安時代後期のものと考えられる土師器甕の口縁部が出土している。

3 中世の遺構

今回の調査で、遺構が一番多く確認された時代である。遺構は調査区全体に広がるが、調査区中央西寄りに土坑が集中している。

SK39 円形で断面が掘り鉢状の土坑である。調査時はSK3としていたが、第1次調査との遺構番号の重複が確認されたため、報告書作成時点での遺構番号をSK39に変更した。南伊勢系の土師器鍋の小片や小皿の小片が出土した。

SK4 円形で断面が掘り鉢状の土坑である。南伊勢系の土師器皿の小片が出土した。

SK6 不整形の土坑である。南伊勢系の土師器鍋や鉄釘が出土した。

SK11 不整形の土坑である。南伊勢系の土師器鍋小片と炭の小片が出土した。

SK12 長円形の土坑である。南伊勢系と考えられる土師器の小片が出土した。

SK13 不整形の土坑である。土坑内全体に、人頭大の石が入っていた。板状の石もあり、壁際では垂直方向に、内側では水平方向となっているものもある。規則に置かれた後、崩落したのであろうか。遺物は、古代のものと考えられる土師器小片が出土したのみであるが、後述のSK27~29と類似しており、この時代の遺構とした。埋土の自然科学分析（リン・カルシウム分析）では、積極的に証明できないが、墓壙である可能性も考えられる。

SK17 不整形の土坑である。平安時代後期の遺物を含むSK21を切り、室町時代の遺物を含む小穴に切られる。近世の天目茶碗1点と、常滑産と考え

られる焼き締め陶器の壺の一部が出土した。

SK18 長円形の土坑である。繩文土器小片と南伊勢系の土師器鍋小片と炭の小片が出土した。繩文土器は混入品と考えられるため、この時代の遺構とした。埋土の自然科学分析（リン・カルシウム分析）では、他の遺構より埋土中のリン酸が富化しており、墓壙である可能性も考えられる。

SK19 円形の土坑である。南伊勢系の土師器鍋体部片と南伊勢系と考えられる小皿の小片、混入品と考えられる繩文時代の磨石1点が出土した。埋土の自然科学分析（リン・カルシウム分析）では、積極的に証明できないが、墓壙である可能性も考えられる。

SK22~26 重複して確認した。SK22・25は深さ20cmほどと浅く、重複状況や断面監察の結果SK23・24・26より新しいことがわかった。SK23・24・26は、いずれも円形で直径1m前後、深さ60cm前後の土坑で、SK24の底部付近には、石が確認された。SK22・23からは、南伊勢系の土師器鍋が、SK24からは南伊勢系と考えられる小皿が、SK26からは南伊勢系の土師器鍋体部と皿の小片が出土している。SK25からは、古代のものと考えられる土師器小片が出土しているが、遺構の前後関係から、SK25をこの時期とした。いずれも、埋土の自然科学分析（リン・カルシウム分析）では、積極的に証明できないが、墓壙である可能性も考えられる。

SK27 直径0.9~1.0m、深さ約70cm円形の土坑である。深さ40cmから底にかけてはオーバーハングし、この部分の径は1.2mになる。オーバーハングする少し上部に帯状に、こぶし大の板状の石が水平方向に確認された。遺物は、南伊勢系の土師器鍋や小皿、青磁碗などが出土した。埋土の自然科学分析（リン・カルシウム分析）では、他の遺構より埋土中のリン酸が富化しており、墓壙である可能性も考えられる。

SK28 不整形の土坑である。土坑内全体に、人頭大の石が入っていた。石の配置は、水平方向に面を持つものが多く見られた。遺物は、南伊勢系の土師器鍋、瀬戸産の陶器平碗、粘土の小塊が出土した。埋土の自然科学分析（リン・カルシウム分析）では、積極的に証明できないが、墓壙である可能性も考え

られる。

SK29 長方形の土坑である。土坑内に全体に、人頭大の板状の石が入っていた。石の配置は、水平方向に面を持つものが多く見られた。遺物は、南伊勢系の土師器鍋、渥美産と考えられる甕の底部などが出土した。埋土の自然科学研究（リン・カルシウム分析）では、積極的に証明できないが、墓壙である可能性も考えられる。

SK30 長方形の土坑である。南伊勢系の土師器鍋が出土した。埋土の自然科学研究（リン・カルシウム分析）では、積極的に証明できないが、墓壙である可能性も考えられる。

SK31 円形の土坑である。遺物は出土していないが、周囲にある同規模の土坑との類似から、この時期と判断した。埋土の自然科学研究（リン・カルシウム分析）では、他の遺構より埋土中のリン酸が富化しており、墓壙である可能性も考えられる。

SK32 円形の土坑である。南伊勢系の土師器鍋の体部が出土した。

SK33 円形の土坑である。古代のものと考えられる土師器小片と炭化物片が出土したが、他の土坑との類似性から、この時期と判断した。

SK35 不整形の土坑である。縄文時代のものと考えられる磨石や土器片、平安時代～中世のものと考えられる土師器小片と粘土塊、炭化物片が出土した。一番新しい遺物から、この時期と判断した。

SK36 不整形の土坑である。南伊勢系の土師器鍋部片と炭の小片が出土した。

SK37 円形の土坑である。南伊勢系の土師器鍋部片と炭化物の小片が出土した。

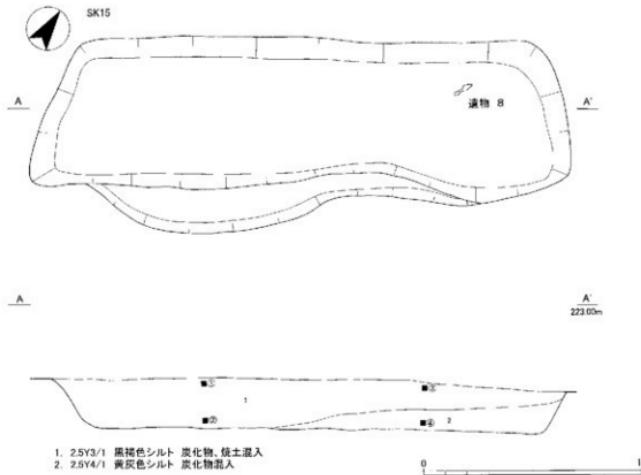
SK38 円形の土坑である。南伊勢系と考えられる土師器小片と小粘土塊が出土した。

4 近世・時期不明の遺構

SK20 精円形の土坑である。土師器小片と近世の陶器擂鉢が出土した。

SE34 石組みの井戸である。約2m掘削したが、土質が脆弱で湧水もあり、崩落の危険があつたためそれ以上の掘削を断念した。遺物は出土していない。

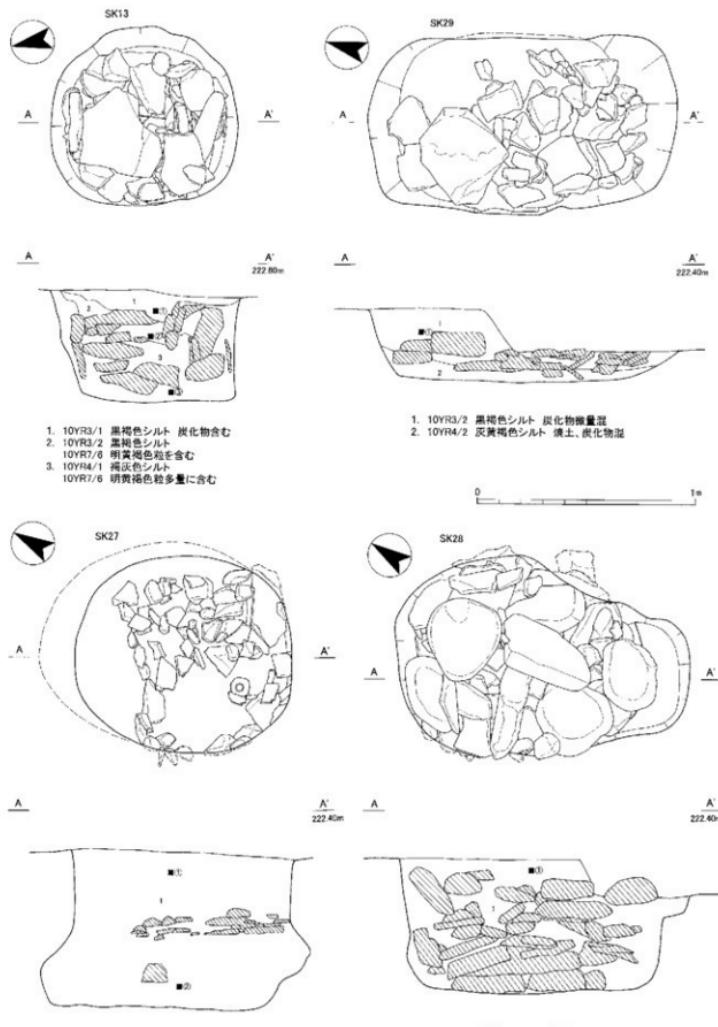
(西村美幸)



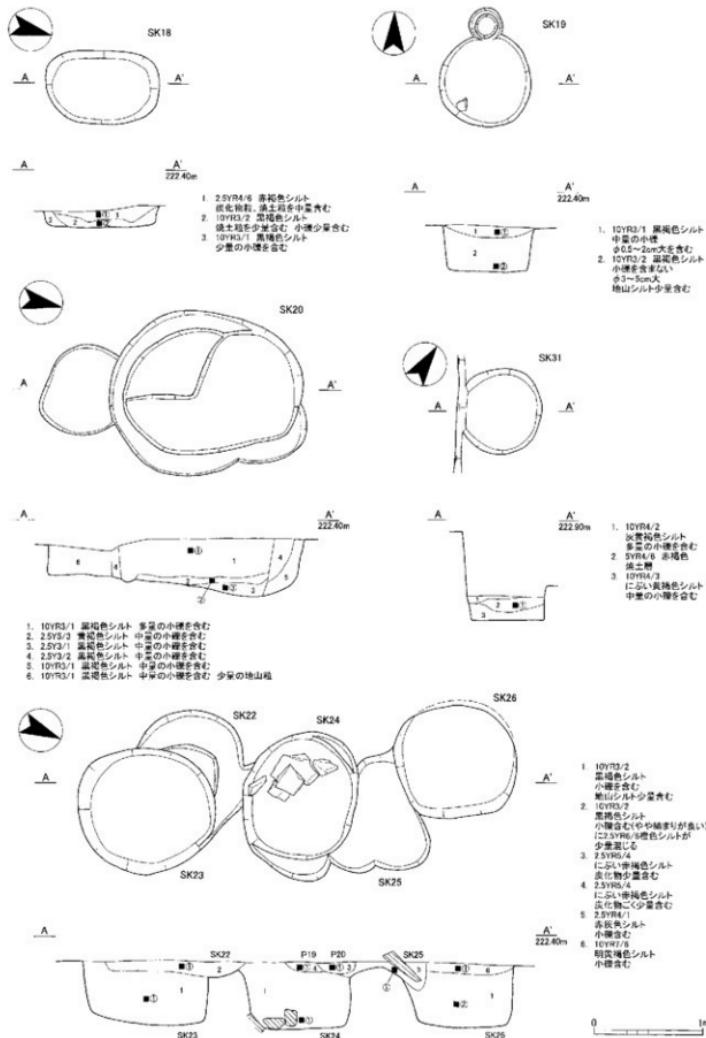
第4図 SK15平面図・断面図(1:20) 【■は土壤理化学分析試料採取位置】

遺構番号	田名	次数	グリッド	形状	規模 (m)	時期	備考	備考
S K 4	S K 4	2次	K 8・9	円形	東西1.4 南北1.4 深さ0.10	室町		
S K 5	S K 5	2次	J 11	不整形	東西0.6 南北1.2 深さ0.10	平安		
S K 6	S K 6	2次	K 10	不整形	東西1.5 南北1.5 深さ0.10	室町		
S K 7	S K 7	2次	L 4	長円形	東西0.6 南北1.1 深さ0.30	鎌文		
S K 8	S K 8	2次	K・L 3・4	不整形	東西1.9 南北4.8 深さ0.10	鎌文		
S K 9	S K 9	2次	K 3	不整形	東西1.1 南北0.7 深さ0.30	鎌文		
S K 10	S K 10	2次	J・K 3	不整形	東西1.3 南北2.1 深さ0.10	鎌文		
S K 11	S K 11	3次	I 26	不整形	東西0.84 南北1.06 深さ0.06~0.16	室町	中央に鍬と土塁が集中	
S K 12	S K 12	3次	I 25	長円形	東西1.04 南北1.12 深さ0.31	室町?		
S K 13	S K 13	3次	G・H 23	不整円形	東西0.64 南北0.66 深さ0.49	室町?		第5図 写真図版3
S D 14	S D 14	3次	J 22~G 20	—	幅0.5~1.2 深さ0.08~0.16	平安		
S K 15	S K 15	3次	I・J 23	長円形	東西1.00 南北1.04 深さ0.06~0.22	平安		第4図 写真図版3
S D 16	S D 16	3次	G 20・21	—	東西0.54 南北1.52 深さ0.05~0.33	平安?		
S K 17	S K 17	3次	H 19・18	不整形	東西0.78 南北0.80 深さ0.26	室町?		
S K 18	S K 18	3次	I 18	長円形	東西0.58 南北0.88 深さ0.13~0.16	室町		第6図
S K 19	S K 19	3次	H 18	円形	東西0.74 南北0.76 深さ0.40	室町		第6図
S K 20	S K 20	3次	G 17・18	楕円形	東西1.08 南北1.50 深さ0.44~0.51	近世		第6図
S K 21	S K 21	3次	H 118・19	長円形	東西1.08 南北1.08 深さ0.53~0.55	平安?		
S K 22	S K 22	3次	H 16	不整形	東西・南北不明 深さ0.15~0.20	室町		第6図
S K 23	S K 23	3次	H 16	円形	東西1.00 南北1.10 深さ0.55~0.56	室町		第6図
S K 24	S K 24	3次	H 17	円形	東西1.06 南北0.92 深さ0.60	室町?		第6図
S K 25	S K 25	3次	H 17	不整形	東西1.10 南北不明 深さ0.16~0.19	室町?		第6図
S K 26	S K 26	3次	H 17	円形	東西1.06 南北1.04 深さ0.58	室町?		第6図
S K 27	S K 27	3次	H 16	円形	東西0.90 南北1.04 深さ0.70	室町		第5図 写真図版4
S K 28	S K 28	3次	H 16	不整形	東西0.80 南北1.20 深さ0.60	室町		第5図 写真図版4・5
S K 29	S K 29	3次	H 16	長方形	東西0.84 南北1.36 深さ0.33	室町		第5図 写真図版4・5
S K 30	S K 30	3次	G・H 16	長方形	東西1.06 南北0.70 深さ0.14~0.20	室町		
S K 31	S K 31	3次	G 15	円形	東西0.68 南北0.68 深さ0.34~0.35	室町?		第6図
S K 32	S K 32	3次	G 17	円形	東西0.84 南北0.84 深さ0.35	室町		
S K 33	S K 33	3次	G・H 18・19	円形	東西1.04 南北0.94 深さ0.34	室町?		
S E 34	S E 34	3次	J・K 15	不整形	東西1.60 南北1.84 深さ不明	時期不明		第7図 写真図版7
S K 35	S K 35	3次	I 15	不整方形	東西2.40 南北2.30 深さ0.21~0.38	室町?		第7図 写真図版7
S K 36	S K 36	3次	J 13・14	不整形	東西1.24 南北2.90 深さ0.22~0.32	室町		
S K 37	S K 37	3次	G 19	円形	東西0.80 南北0.84 深さ0.20	室町?		
S K 38	S K 38	3次	H 18	円形	東西0.60 南北0.56 深さ0.23~0.26	室町?		
S K 39	S K 3	2次	K・L 8・9	円形	東西1.50 南北1.40 深さ0.15	室町	第1次調査と重複のため番号変更	

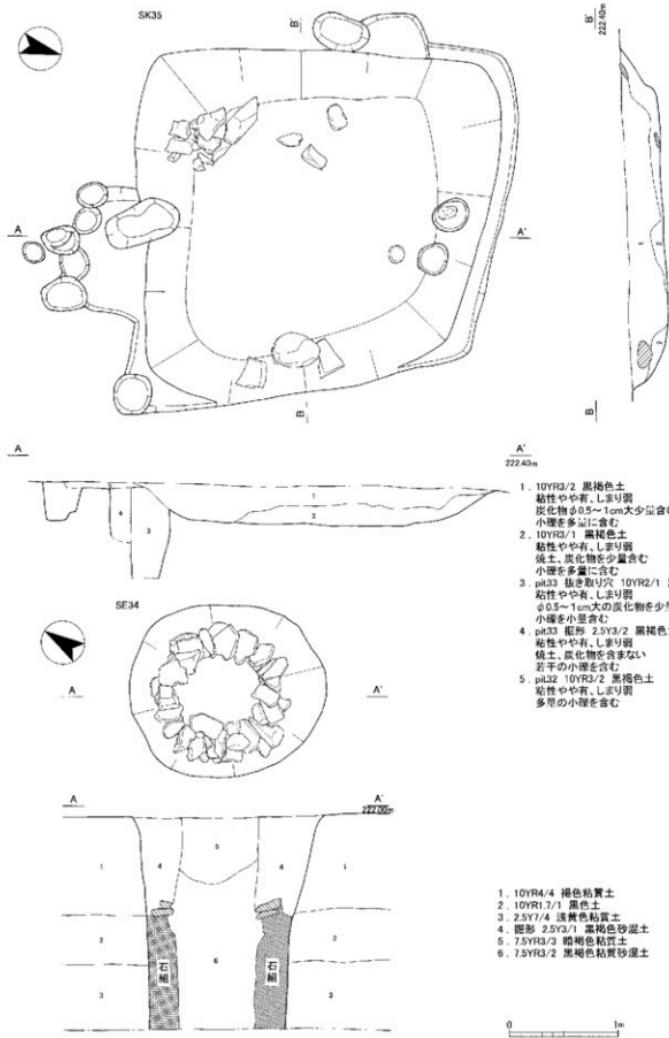
第2表 遺構一覧表 [遺構番号は、第1次調査で1~3番を使用しているため、今回は4番から始まっている]



第5図 SK13・27・28・29平面図・断面図(1:20) [■は土壤理化分析試料採取位置]



第6図 SK18・19・20・31・22～26平面図・断面図 (1:40) [■は土壤理化学分析試料採取位置]



第7図 SK35・SE34平面図・断面図 (1:40)

第4章 遺 物

第1節 遺構出土の遺物

1 繩文時代の遺構出土の遺物

S K7出土遺物（1～3）

縄文土器片（1・2）、石錐（3）などが出土した。1は、口縁部が肥厚しているもの、2は、外面に細い条線が施されているものである。いずれも縄文時代後期のものであろう。3は、細長い石の両端に切目が入れられている。

S K8出土遺物（4～6）

縄文土器片（4～6）などが出土した。4は小片であるが、縄文と沈線で区切った無紋帶の模様を持つ。5・6は、沈線で区画した模様を持つ。いずれも縄文時代後期初頭の中津式並行期に相当する。

S K9出土遺物（7）

縄文土器、サヌカイト剥片（チップ）が出土した。縄文土器（7）は、口縁部を内面に折り返している。小片のため、詳細な時期は不明である。

2 古代の遺構出土の遺物

S K15出土遺物（8）

平安時代後期の甕と考えられる土師器片などが出士したが、小片のため図示できなかった。鉄鍼（8）には有茎鐵で、茎の途中で折れている。刃部は平坦で、ほとんど稜を持たない。

3 中世・近世の遺構出土の遺物

S K6出土遺物（9・10）

鉄釘（9）、土師器鍋（10）などが出土した。10は、南伊勢系土師器編年の第4段階c形式（15世紀末）に相当する。

S K17出土遺物（11）

陶器天日茶碗（11）は、登窯編年の第1小期（17世紀前半）に相当する。この他、常滑産と考えられる焼き締め陶器壺の体部も出土した。

S K28出土遺物（12）

南伊勢系土師器鍋片（第4段階・15～16世紀代）が出土したが、小片で図示できるものはなかった。陶器平椀（12）は、古瀬戸編年の後IV期（新）（15世紀後半）に相当する。

S K19出土遺物（13）

南伊勢系土師器鍋片（第4段階・15～16世紀代）および、南伊勢系の小皿片などが出土した。いずれも小片で図示できるものはなかった。磨石（13）は、縄文時代のものであり、混入品と考えられる。

S K20出土遺物（14）

陶器擂鉢（14）は、登窯編年の第1～4小期（17世紀代）のもので、内面には、10本程度の磨り目を持つ。この他、南伊勢系の土師器小片が出土した。

S K27出土遺物（15～19）

南伊勢系の土師器小皿（15）、鍋（18・19）、青磁椀（16・17）など、比較的遺物がまとまって出土した。18は南伊勢系土師器編年の第4段階c形式（15世紀末）に相当する。

S K29出土遺物（20）

土師器鍋（20）は、南伊勢系土師器編年の第4段階c形式（15世紀末）に相当する。この他、渥美産と考えられる甕の底部片が出土した。

S K35出土遺物（21～22）

平安時代から中世にかけての遺物が出土した。土師器杯（21）は、斎宮跡土器編年の第II期第3段階（9世紀後半）に相当する。磨石（13）は、縄文時代のものであり、混入品であろう。

4 小穴出土の遺物（23～31）

今回の調査で確認された小穴の多くから遺物が出土した。それぞれの遺物出土量は少量である。ここでは、図上復元が可能なものを図示した。

弥生土器無頸壺（23）は、頸部に簾状文が施されている。弥生土器編年のIV-1様式（弥生時代中期後半）に相当する。土師器杯（24）、土師器甕（26・27）は、概ね斎宮跡土器編年の第III期第2段階（11世紀前半）に相当する。灰釉陶器甕（25）は、東濃産で、百代寺式（11世紀代）に相当しよう。青磁椀（29）は、見込み部に幾何学文のスタンプ文が施されている。南伊勢系土師器鍋（30・31）は、第4段階c形式（15世紀末）に相当する。

第2節 包含層等出土遺物

包含層からは、縄文時代から近世にかけての遺物が出土した。ここでは、図上復元が可能なものを図示した。

1 縄文時代の遺物（33～35）

33・35はいずれも口縁部が肥厚し、模様を持つ。深鉢であろうか。縄文時代後期のものであろう。34は、外面に縄文が施されている。

2 弥生時代の遺物（36～39）

36は、口縁部が肥厚し、外面に施文されている。台付鉢であろうか。無頬壺（37）は、頬部に簾状文が施されたもので、23と類似している。壺（38）は、口縁部内面に波条文が施されている。高杯（39）は、

〔註〕

- ① 遺物の年代等に関しては、以下の文献を参考にした。
なお、陶器類の時期や产地に関して、愛知学院大学教授 藤澤良祐氏にご教示を得た。
- ・ 縄文土器：『縄文土器大観4 後期 晩周 統縄文』 小学館 1989年
 - ・ 弥生土器：上村安生『伊勢・伊賀地域』『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社 2002年
 - ・ 壺宮跡土器編年：『壺宮跡発掘調査報告Ⅰ 内院地区的調査本文編』壺宮歴史博物館 2001年
 - ・ 灰釉陶器：齊藤孝正『東海地方の施釉陶器－施投票を中心について』『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3 施釉陶器－』古代の土器研究会 1994年
 - ・ 南伊勢系土器：伊藤裕介「南伊勢系の土器に関する一試論」『Miehistory vol.1』三重歴史文化研究会 1990年及び、伊藤裕介「南伊勢系土器の展開と中世土器工人」『研究紀要 第1号』三重県埋蔵

口縁部を水平に引き出し、端部が垂下する。いずれも、概ね伊勢地域の弥生土器編年のIV-1式（弥生時代中期後半）に相当すると考えられる。

3 古代の遺物（40・42）

黒色土器碗（40）は内面が黒化されている。42は、小片で表面が消耗しているが、胎土などから志摩式製塙土器の体部と考えられる。二次焼成を受けた可能性がある。

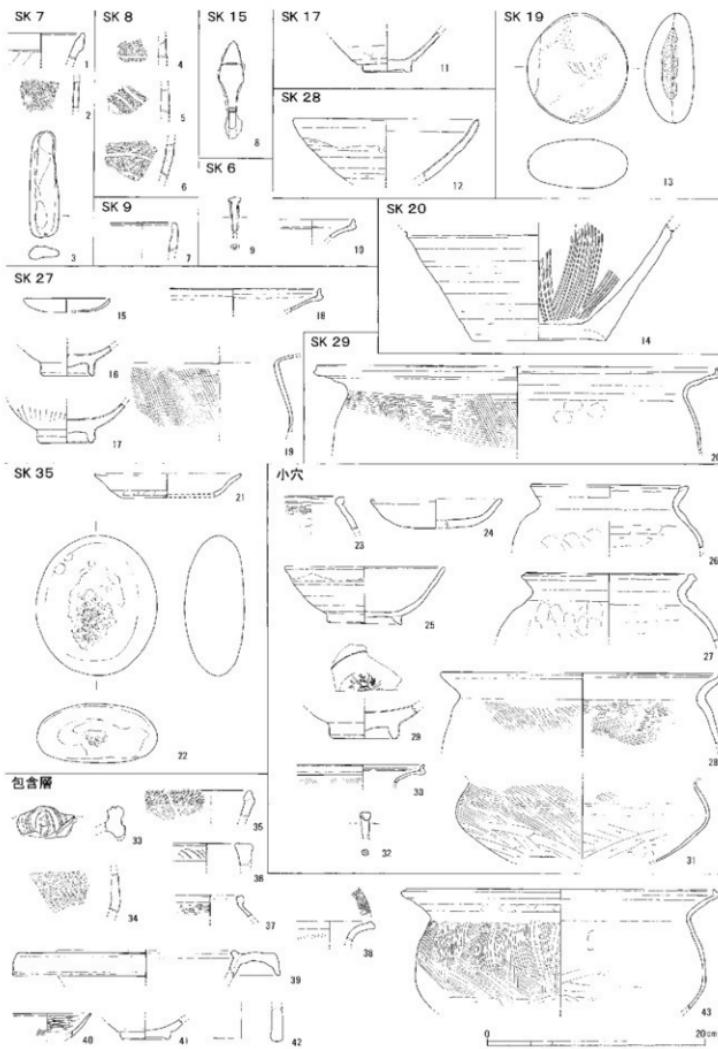
4 中・近世の遺物（41・43）

天目茶碗（41）は、大窯編年の第2段階（16世紀前半）に相当する。土師器鍋（43）は、南伊勢系のもので、第4段階c形式（15世紀末）に相当する。

（西村美幸）

文化財センター 1992年

- ・ 陶器（古瀬戸）：藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要X』瀬戸市歴史民俗資料館 1991年
- ・ 陶器（大瀬戸）：藤澤良祐ほか「瀬戸市史 陶磁史篇四」愛知県瀬戸市 1987年
- ・ 陶器（登家）：藤澤良祐「本業焼の研究（1）」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要VI』瀬戸市歴史民俗資料館 1987年
- ② 三重県内出土の青磁のスタンプ文については、柴山圭子「三重県内出土青磁におけるスタンプ文の分類」『Mie history vol.17』三重歴史文化研究会 2006年 で集成されている。幾何学文で、文様を4分割したものが、伊勢市中新遺跡などで見られるが、今回の資料は、文様を6分割以上したものと考えられる。



第8図 出土遺物実測図(1:4)

番号	測量番号	種	質	基準など	形態	グリット	遺物・特名等	出量(cm)	調査・出法の特徴	出土	色 調	腐食度	特記事項
1	003-03	鐵文土器	鋤頭?	2次	L4	S.K7			R. トロナガードコロード R. ナイフコロードコロード	黒	高麗 R. 高麗	2.73M2-2 2.73M7-2	小石
2	003-09	鐵文土器	鋤頭?	2次	L4	S.K7			R. 鉄 R. ナイフ	黒	高麗 R. 高麗	10YR4-2 10YR5-2	小石
3	002-03	石器	刃口石器	2次	L4	S.K7	(E)9.5(12).7	—	—	—	—	—	完形 重量40g
4	004-02	鐵文土器	鋤頭?	2次	L4	S.K8			R. 鉄 R. ナイフ	黒	高麗 R. 高麗	10YR4-1	小石
5	004-01	鐵文土器	鋤頭?	2次	L4	S.K8			R. ナイフ	黒	高麗	2.3YR7-3	小石
6	004-03	鐵文土器	鋤頭?	2次	L4	S.K8			R. ナイフ	黒	高麗	10YR5-4	小石
7	003-02	鐵文土器	鋤頭?	2次	K3	S.K9			R. ナイフコロード R. ナイフコロード	黒	高麗	2.73M8-3	小石
8	006-04	鉄製品	鍔	3次	J23	S.K15	(E)6.0(10).8 (E)6.0(10).9	—	—	—	—	—	頭部欠損
9	004-04	鉄製品	釘	3次	K10	S.K6	(E)6.0(12).2 (E)6.0(7).10(5.5)	—	—	—	—	—	先端欠損
10	003-01	土器	罐	3次	K10	S.K6			R. ナイフエッジナズ S. 村井	黒	R. 高麗 R. 高麗	10YR7-2 10YR8-2	小石
11	009-01	陶器	大日形壺	3次	11B	S.K17	(E)4.2	—	R. コロナリ R. コロナリ	黒 黒	高麗 R. 高麗	32Y1 32Y2	高台跡に無形
12	005-06	陶器	平壺	3次	H16	S.K28	(L)17.0	—	R. コロナリ R. コロナリ	黒 黒	高麗 R. 高麗	2.3YR7-2 10YR5-3	10縁部3.12
13	007-02	G器	瓶	3次	H18	S.K19	(E)11.2 (E)10.2 (E)9.5(2.1厚).4	—	—	—	—	—	完好 重量500g
14	007-01	陶器	植鉢	3次	G17	S.K20	(H)12.1	—	R. コロナリエッジ R. 高麗(4.6cm-1)鉢脚	黒	高麗	7.3YR4-1	高台跡3.12
15	009-02	土器	小豆	3次	H16	S.K27	(11.7-8 (E)6.0)	—	R. ナイフ R. ナイフ	黒 黒	R. 高麗 R. 高麗	3YR6-8 3YR6-9	10縁部3.12
16	005-05	青磁	碗	3次	H16	S.K27	(E)5.0	—	R. コロナリ R. コロナリ	黒 黒	高麗 R. 高麗	7.3YR7-3 10YR7-2	高台跡に無形
17	005-04	青磁	碗	3次	H16	S.K27	(E)5.2	—	R. コロナリ R. コロナリ	黒 黒	高麗 R. 高麗	7.3YR7-3 10YR8-3	高台跡に無形
18	006-03	土器	罐	3次	H16	S.K27		—	R. ナイフ R. ナイフ	黒 黒	R. 高麗 R. 高麗	7.3YR6-2 7.3YR8-2	小石
19	005-03	土器	罐	3次	H16	S.K27		—	R. ナイフ R. ナイフ	黒 黒	R. 高麗 R. 高麗	10YR7-2	小石
20	008-01	土器	罐	3次	H16	S.K29	(11.0-8.4	—	R. ハンドル R. オリエーナル	黒 黒	R. 高麗 R. 高麗	10YR8-3	10縁部3.12
21	003-01	土器	杯	3次	115	S.K35	(11.0-1.4 (E)2.2	—	R. ナイフ R. ナイフ	黒 黒	R. 高麗 R. 高麗	7.3YR7-6	10縁部3.12
22	009-04	石器	磨石	3次	3.15	S.K35	(E)1.8 (E)1.6(0.5厚.)5.5	—	—	—	—	—	完好 重量1,150g
23	003-03	鐵生土器	無柄鏡	3次	3.15	P.29		—	R. ナイフ R. ナイフ	黒 黒	中古 R. 中古	3YR6-6	小石
24	001-06	土器	植鉢	2次	K8	P.1	(11.0-12.0 (E)2.6	—	R. ナイフ R. ナイフエッジナズ R. ナイフコロード	黒 黒 黒	中古 R. 中古	3YR7.6	10縁部3.12
25	001-01	陶器	陶器	2次	K8	P.2	(11.0-12.0高さ5.3 (E)4.8	—	R. コロナリエッジ R. コロナリエッジ	黒 黒	中古 R. 中古	2.3YR7.1	10縁部3.12 耐熱度
26	006-01	土器	甕	3次	123	P.37	(11.0-12.2	—	R. ナイフ R. ナイフ	黒 黒	中古 R. 中古	10YR8-3	10縁部3.12
27	001-01	土器	甕	2次	K.8	P.1	(11.0-8.0	—	R. オリエーナル R. オリエーナル	黒 黒	中古 R. 中古	10YR8-2	10縁部3.12
28	005-01	土器	甕	3次	H24	P.2	(11.0-8.0 (E)5.8	—	R. ハンドル R. ハンドル	黒 黒	中古 R. 中古	7.3YR9-4 7.3YR7.6	10縁部3.12
29	001-04	青磁	碗	2次	J.8	P.3	(E)5.8	—	R. コロナリエッジ R. コロナリエッジ	黒 黒	高麗 R. 高麗	N8.9	10縁部3.12 見込みにスタンプ入
30	006-02	土器	植鉢	3次	H18	P.21		—	R. ハンドル R. ハンドル	黒 黒	中古 R. 中古	3YR6-4 7.3YR8-2	小石
31	005-02	土器	甕	3次	H17	P.18	(E)2.2 (E)10.6	—	R. ハンドル R. ハンドル	黒 黒	中古 R. 中古	7.3YR8-3	10縁部3.12
32	004-05	鉄製品	釘	2次	2.19	P.1	(E)12.4 (E)10.7(10.6	—	—	—	—	—	先端欠損
33	002-02	鐵文土器	鋤頭?	2次	—	表土層			R. 田植付土 R. ナイフコロード	黒	高麗	7.3YR7.3	小石
34	002-01	鐵文土器	鋤頭?	2次	—	表土層			R. 田植付土 R. ナイフコロード	黒	高麗	10YR8-2	小石
35	003-08	鐵文土器	鋤頭?	2次	J.4	合合層			R. ナイフコロード R. ナイフコロード	黒	高麗	10YR8-4	小石
36	003-02	鐵生土器	台形鉢?	3次	J.14	合合層			R. ナイフコロード R. ナイフコロード	黒	中古 R. 中古	3YR6-6	小石
37	003-06	鐵生土器	無柄鏡	2次	—	合合層			R. 錫 R. 錫	黒	中古	7.3YR5.6	小石
38	003-05	鐵生土器	甕	2次	—	合合層			R. ハンドル R. ハンドル	黒	高麗	10YR7.4	小石
39	001-02	鐵生土器	高杯	2次	K11	合合層	(11.0-6.2 (E)2.5	—	R. ナイフ R. ナイフ	黒 黒	高麗	10YR8-3	10縁部3.12
40	003-07	黑色土器	碗	2次	K11	合合層			R. 田植付土 R. ナイフコロード	黒	高麗	7.3YR7.4 N4.1	小石
41	001-05	陶器	大日形壺	2次	—	合合層	(E)1.6	—	R. コロナリエッジ R. 田植付土	黒 黒	高麗 R. 高麗	10YR8-3	10縁部3.12 背板無形
42	001-04	土器	粗粒土器	3次	—	表土層			R. 錫 R. 錫	黒	中古	7.3YR5.6	小石 志摩式?
43	002-02	土器	甕	3次	K16	合合層	(11.0-28.0	—	R. ハンドル R. ハンドル	黒 黒	高麗	7.3YR7.3	10縁部3.12 外面に削痕有

第3表 出土遺物觀察表

第5章 岸本遺跡の自然科学分析

1はじめに

岸本遺跡は柳田川左岸の段丘上に位置する。今回の発掘調査では、中世の土坑が多数検出されている。この土坑の中には、石や土器が出土しているものもあるが、全体的に遺物に乏しく、遺構の性格として墓と考えられているが、人骨などは見つかっていない。今回の分析調査では、墓と考えられている遺構について、リン・カルシウム分析ならびに微細物分析を実施し、遺体埋納の可能性に関する情報を得る。

2 試料

分析試料は、発掘調査時に調査担当者により採取されている。リン・カルシウム分析用試料は、SK13から3点、SK15から4点、SK18から2点、SK19から2点、SK22、SK23、SK24、SK25から各1点、SK26から2点、SK27から2点、SK28、SK29、SK31から各1点の計22点である。また、対照試料として、中世の包含層2点、包含層下の遺構検出面2点、表土2点、現在の水田土壤2点の計8点が採取されている。これら各試料の詳細については結果と表1・図1に示す。一方、微細物分析用試料は、リン・カルシウム分析を実施するSK26埋土底部より不擾乱資料として採取された。分析には埋土部分の20×20×40cm、重さにして約29kgについて使用する。

3 分析方法

(1) 微細物分析

試料のほぼ全量(約16リットル 29kg)を2mmの篩を通しながら水洗し、残渣を集め。これらをルーベ等で観察して、微細物を抽出する。試料のうち、1%程度(200cc;352g)は別に取り置き、精査を行った。この試料は、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャレに集めて双眼实体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実や2mm角以上の炭化材などを抽出する。分析後の種実は70%程度のエタノール溶液と共に容器に入れ、炭化材や残渣は、70°C48時間乾燥重量測定後、容器に入れて返却する。

(2) リン・カルシウム分析

リン酸は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン

酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解-原子吸光光度法、腐植はチューリン法で実施する(土壤養分測定法委員会,1981;土壤標準分析・測定法委員会,1986)。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105°C、5時間)により測定する。風乾細土試料の一部を粉砕し、0.5mmのふるいを全通させる(微粉砕試料)。

風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P2O5)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P2O5mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

4 結果

(1) 微細物分析

分析の結果、数ミリ角の炭化材が数個検出された程度で、骨片は検出されなかった。残渣のほとんどは、版状にはがれやすい頁岩や結晶片岩などである。これらの岩石片は、ほとんどが三波川帯に由来する泥質片岩からなり、泥質片岩中に産する石英脈の白い破片も少量確認される。精査の結果をみても、土壤試料200cc中からは、草本のザクロソウ科の種子が1個と炭化材が數片程度検出された程度である。ザクロソウ科(Aizoaceae)の種子は、赤褐色、腎臓状円形でやや偏平。径0.7mm程度。基部は凹み、脐がある。種皮は薄く、表面には微細なドーム状突起が縦を取り巻むように同心円状に配列する。

(2) リン・カルシウム分析

結果を表1・図1に示す。土坑埋土試料のリン酸含量をみると、2.5~4.0mg/gの中にはほとんどの試料が入るが、SK18、SK27、SK31には、4.0mg/gを

超える試料がある。一方、対照試料をみると、中世の包含層2点、包含層直下の遺構検出面2点は約2.0mg/g以下で、遺構内と比較して明らかに低い。表土や現在の水田土壤については、4~5mg/gを示すものが多く、遺構内土壤よりもやや高い値を示す。

カルシウム含量をみると、土坑内では約2.0~5.0mg/gの中にはほとんどの試料が収まる。一方、対照試料をみると、中世の包含層2点、包含層直下の遺構検出面2点は約2.0mg/g以下で、遺構内と比較して明らかに低い。表土や現在の水田土壤については、3~10mg/gとばらつきが大きい。

5 考察

微細物分析の結果、炭化物が微量検出された他、骨片等は検出されなかつた。日本のような酸性土壤の場合、骨は残りにくい場合が多いため、墓坑であつたとしても残存していない可能性は高い。また、検出されたザクロソウは、人里や田畠などにみられるいわゆる「雑草」の一種であり、当時生育していたものに由来する可能性があるが、分析量と1個体の産出量を踏まえると、上位層からの落ち込みの可能性も否めない。次にリン・カルシウム分析結果について検討する。

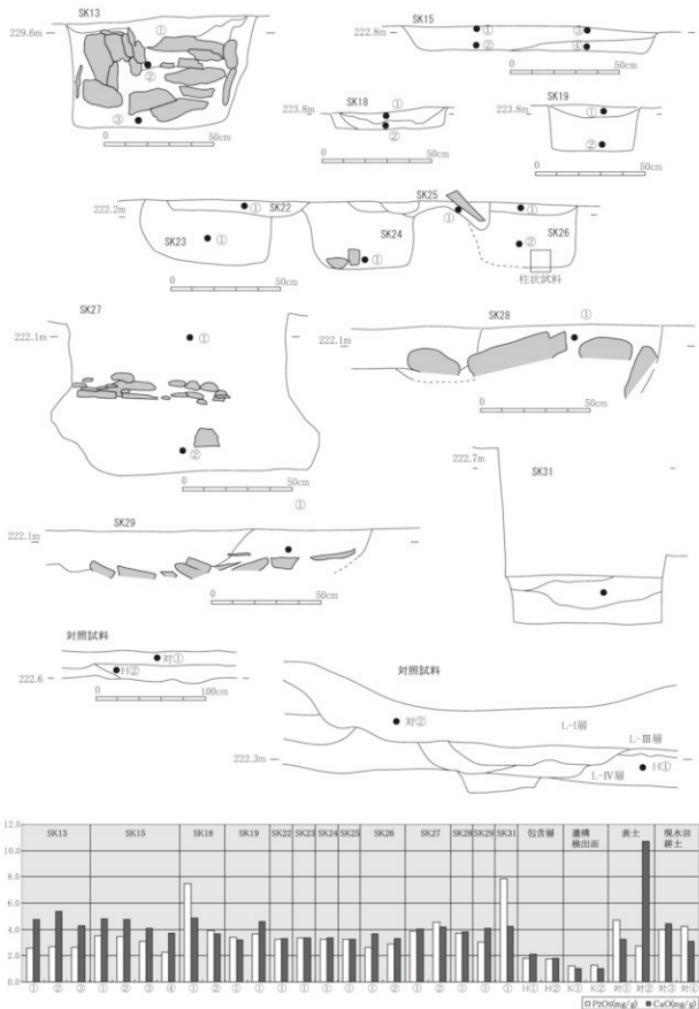
リン酸は、動物遺体に多く含まれる無機元素であるため、遺構埋土に多量に含まれていれば遺体埋納を傍証する資料となる（竹迫、1993）。しかしながら、リン酸は動植物の必須元素であり、自然状態の土壤中にも含まれ、土質や調査地の水分条件によってその含量も異なる。そのため、遺体埋納を推定するためには、土壤が自然状態で保持しているリン酸量を知ることが重要である。自然状態において土壤中に含まれるリン酸量は、腐植が多いほど高い。これは腐植中に植物由来のリン酸が含まれているからである。また粒径組成が細かいほど成分が流失しにくいで、この場合もリン酸量が高くなる。例えば、遺物包含層の方が遺構構築面の直下層よりもリン酸含量が多い場合、これは、遺物包含層の方が粒径が細かく、腐植が多い（土色が黒い）ことに由来する場合が多い。今回のような土坑内に遺体が埋納された場合、このような自然条件とは無関係にリン酸値が増えるため、埋納の指標になりえる。

各土坑の結果をみると、SK13とSK26は2.5~3.0

mg/g程度であり、遺物包含層や遺構面検出面の対照試料や他の遺構より低い値となっている。SK15・SK19・SK22・SK23・SK24・SK25・SK29は3.0~3.5mg/g程度で安定し、遺物包含層や遺構面検出面の対照試料や他の遺構よりも幾分高い傾向にある。SK18・SK27・SK31は3.9mg/gを超える試料が存在し、対照試料と同等もしくはそれ以上の値を示している。なお、対照試料である現在の表土や水田土壤ではリン酸値が高ったが、これらは化学肥料等の影響による判断される。

このように各土坑埋土のリン酸含量は遺構間でバラツキがある。SK15・SK19・SK22・SK23・SK24・SK25・SK29埋土は遺物包含層および遺構検出面の対照試料に比較して高い値を示す試料が多く、何らかの要因によりリン酸が富化している可能性がある。しかしながら、これら高い値を示す試料は、他の遺構埋土試料と比較して粘土分が多いことから、本来、自然状態においてもリン酸を保持しやすい土壤であったと考えられる。したがって、これらの土坑埋土については遺体埋納等の影響による可能性があるが特定するには至らない。この点については、腐植含量の測定等を行い、リン酸と腐植の相関関係を踏まえた検討が必要である。一方、SK18・SK27・SK31埋土では4.0mg/gを超える試料が存在し、リン酸が富化している状況が確認される。このうちSK18については埋土上位で高い値を示すことから、攪乱等によって表土が落ち込んだ可能性も否定できないが、SK27やSK31では、表土の値と同等もしくは高い値を示すことから、遺体が埋納されていた可能性は高いといえる。なお、これらSK18・SK27・SK31土坑については、現地調査時の埋土の堆積量・土壤学的な累重状況に関する所見に基づいて評価する必要がある。

各土坑埋土におけるカルシウム含量は、対照試料とした包含層や遺構検出面と比較してやや高い値が得られている。しかし、カルシウムは水に溶けやすいため値のばらつきが大きくなる傾向があること、表土や水田耕土の値が高いことを考慮すると、今回の結果にみられる程度の差では遺体埋納の決め手にはならないと判断される。



第9図 試料採取位置とリン・カルシウム分析結果

6まとめ

岸本遺跡で検出された中世の土坑における遺体埋納の可能性を検討するために、遺構埋土および対照試料についてリン・カルシウム分析、微細物分析を実施した。その結果、骨などの微細物は確認することができなかつたが、リン分析によつてSK18やSK31埋土には対照試料よりも高い値が得られ、埋土中にリン酸が富化していることが確認された。このリン酸の富化の原因としては、遺体埋納が可能性の一つとして考えられた。

(パリノ・サー・ヴェイ株式会社)

【引用文献】

- ・土壤標準分析・測定法委員会編『土壤標準分析・測定法』
博友社 1986年 354 p

・土壤養分測定法委員会編『土壤養分分析法』養賢堂 1981年 440p

・石川茂雄『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会 1994年 328p

・中山大・井之口希秀・南谷忠志『日本植物種子図鑑』東北大学生出版会 2000年 642p

・農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』1967年

・ペドロジスト懇談会編『土壤調査ハンドブック』博友社 1984年 156p

・竹追乾『リン分析、第四紀試料分析法2 研究対象別分析法』日本第四紀学会編、東京大学出版会1993年 p.38-45

地点名	試料名	土性	土色	P ₂ O ₅ (mg/g)	CaO(mg/g)
SK13	①	CL	2.5Y3/2	黒褐色	2.60
	②	CL	2.5Y3/2	黒褐色	2.71
	③	CL	2.5Y3/2	黒褐色	2.63
SK15	①	LIC	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	3.53
	②	CL~LIC	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	3.46
	③	CL~LIC	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	3.08
	④	CL~LIC	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	2.26
SK18	①	HC	10YR3/4	暗褐色	7.48
	②	HC	10YR3/2	黒褐色	3.92
SK19	①	LIC	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	3.41
	②	HC	2.5Y3/2	黒褐色	3.67
SK22	①	HC	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	3.28
SK23	①	HC	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	3.36
SK24	①	HC	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	3.27
SK25	①	HC	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	3.27
SK26	①	LIC	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	2.62
	②	LIC	2.5Y4/3	オリーブ褐色	2.88
SK27	①	LIC	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	3.89
	②	LIC	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	4.55
SK28	①	LIC	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	3.73
SK29	①	LIC	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	3.04
SK31	①	CL	7.5YR4/4	褐色	7.88
(中世) 骨(?)	H ①	CL	10YR2/3	黒褐色	1.83
	H ②	CL	10YR2/3	黒褐色	1.78
遺構表面 (包含層下断面)	K ①	SL~SCL	2.5Y4/4	オリーブ褐色	1.24
	K ②	SL~SCL	2.5Y4/4	オリーブ褐色	1.27
比較試料 (表土)	対 ①	HC	2.5Y3/2	黒褐色	4.71
	対 ②	(G)CL	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	2.73
比較試料 (周辺の水田土)	対 ③	CL	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	3.99
	対 ④	CL	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	4.24

土色：マンセル色彩系に準じた新版標準土色帖（農林省林木生産技術会議監修、1967）による。

土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性による。

SL：砂礫土（粘土10~15%、シルト0~35%、砂55~85%）

CL：埴土（粘土15~25%、シルト0~45%、砂3~65%）

SCL：砂質埴土（粘土25~45%、シルト0~45%、砂10~55%）

LIC：輕埴土（粘土25~45%、シルト0~45%、砂10~55%）

HC：重埴土（粘土45~100%、シルト0~55%、砂0~55%）

第4表 土壤理化学分析結果

第6章 調査のまとめ

調査の結果、岸本遺跡は、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが確認された。以下、主

要な遺構及び遺物の検討を通じ、岸本遺跡の性格や位置づけを考えたい。

第1節 縄文時代及び弥生時代の状況

1 縄文時代の遺構と遺物

今回の第2・3次調査では、縄文時代の遺構は、はつきりした輪郭を持たず、自然地形の落ち込みであるとも考えられる。また、遺物が検出面に若干「めり込む」形で出土していることから下層の存在も想定し、トレンチ調査を行ったが、下層の遺物・遺構を確認することはできなかった。平成12年度に飯高町によって行われた分布調査、範囲確認調査では、調査坑13から堅穴住居と考えられる遺構が確認され、遺跡の中央部からは多量の縄文土器が出土している。縄文時代の遺跡の中心地は、これらの水田部分であり、今回の第2・3次調査区は、縄文時代の遺構の周縁であると考えられる。

また、今回の調査で出土した縄文時代の遺物は、中津式並行期など後期を中心とする。第1次調査及び平成12年の範囲確認調査で出土した遺物も概ね後期前半（4,000年ほど前）の遺物と考えられよう。この時期は、県内でも全般的に遺跡数、分布範囲が拡

大する時期とされており、郷田川沿いでも遺跡数などの拡大が見られる³。第1章でも触れたように、岸本遺跡は現段階では郷田川最上流の縄文時代遺跡で、下流の飯高町赤桶にある宮ノ東遺跡からは10kmほど離れている。今後これより上流の遺跡が確認される可能性もあるが、縄文時代後期前半には岸本遺跡がある程度拠点的な遺跡であったと考えられよう。

2 弥生時代の遺物

弥生時代の明確な遺構は、第1～3次調査を通じて確認できなかったが、いずれの調査でも、中期の遺物が少量ながら出土している。

郷田川上流では、飯高町七日市の辺境内遺跡で弥生時代前期の遺物が確認され、中期の遺跡は七日市周辺で数を増やしており、弥生文化の定着が考えられた。岸本遺跡からの弥生時代中期（2,000年ほど前）の遺物の出土も、これらの弥生文化定着の一環と考えられよう。

（西村美幸）

第2節 中世土坑群の分析

第3次調査では、土坑を多数検出することができた。ほとんどが中世（室町時代後期、15世紀末）に属するものと考えられる。これらについては、石が集中しているものや土器あるいは炭化物、焼土が混入しているものがほとんどであった。土坑全体でいえることは、遺物の出土量が少なく、所属時期や性格の査定の判断がむずかしいことである。ここでは、形態の傾向や自然科学分析結果から若干の分析を加えてみたい。

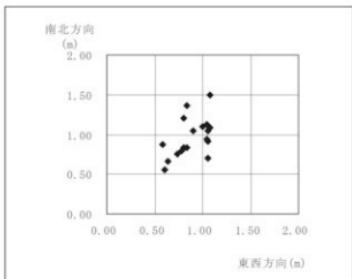
（1）規模及び形態の傾向

対象となる土坑群は規模が計測できるSK12・13・17・18・19・20・21・23・24・26・27・28・29・30・32・33・37・38とした。第10回にまとめたとおり、東西方向軸の長さは、平均値0.89m、最大値1.08m、

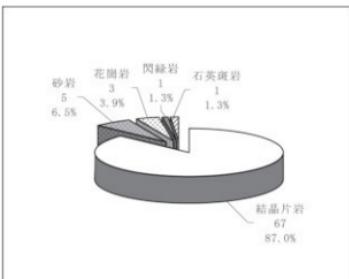
最小値0.58m、南北方向軸の長さは、平均値0.96m、最大値1.50m、最小値0.56mという統計結果となつた。また、第2表や第5、6図にあるように、形状としては概ね円形を呈することがわかる。

（2）埋土及び内容物

ここでは、遺構内の埋土等の内容物を吟味したいと思う。対象となる土坑群としては、SK13・15・18・19・22・23・24・25・26・27・28・29・31とする。埋土及び内容物については、微細分析とリン・カルシウム分析を行った。微細分析の結果は、骨片は検出されず、ザクロソウ科の炭化種子と炭化材が少量検出された。リン・カルシウム分析については、一部の土坑（SK18・27・31）でリン酸の濃集が確認できた。詳細については第5章を参照願いたい。



第10図 土坑群の規模



第11図 SK13内出土石材

また、SK13内では、石の集中が見られ、77点の石を確認した。これらの石材の内訳は、結晶片岩67点、砂岩5点、花崗岩3点、閃綠岩1点、石英斑岩1点というものであった。これらの石材の割合については、第11図に示した。石が多量に入った構造内で確認された石材は、概して遺跡周辺で存在するものと考えられる。何らかの理由で投棄された可能性があろう。類似した土坑群に石の集中がないものも確認されているので、その差はどのような理由から

なのであろうか。興味は尽きない。

(3) 土坑群の性格と可能性

形態から、墓的な性格を持つものであることは、類推することはできよう。しかしながら、自然科学分析結果からは、遺体埋納の可能性が指摘されてはいるが、判然としないという見解をもたざるをえない。ここでは、土坑群の性格が墓の可能性があることを留めておきたい。

(小瀬 学)

第3節 岸本遺跡の位置づけ

今回の第2・3次調査では、道路建設の事業地内という限られた範囲内で、住居跡等を確認することはできなかったが、縄文時代から中世にわたる遺構・遺物を確認することができた。

縄文時代後期前半（4,000年ほど前）の遺跡の中心は前述のとおり調査区より櫛田川沿いに展開すると考えられ、弥生時代中期（2,000年ほど前）についても調査区の周辺に集落が存在する可能性があろう。岸本遺跡は、現段階での櫛田川最上流の縄文時代・弥生時代の遺跡であり、これらの文化伝播についての貴重な資料となった。

古代については、遺構・遺物は比較的少なかったが、ほぼ完形の灰釉陶器が出土した小穴も確認された。第1次調査では、平安時代末葉（12世紀末）の掘立柱建物が確認されており、今回の調査区周辺にこの時代の中心地が見られる可能性が考えられる。

また、中世については、室町時代後半（15世紀末）を中心とした土坑群が確認され、当時の墓制を考える上で貴重な成果をえることができた。調査区内ではこの時期の建物は確認できなかつたが、岸本遺跡から南西に100mほど離れた緩斜面にある、寺のまへ遺跡からは、この時期の遺物が採集されており、あるいは集落と墓域といったような関係も想定できう。

岸本遺跡の調査結果から、人々の生活の痕跡が断続的ながらも確認され、川俣谷と呼ばれたこの地域に暮らしていた人々の生活の一端を知ることができた。

（西村美幸）

【註】

① 奥義次「原始」『飯高町郷土誌』飯高町 1986年

② 前掲①文献。

写 真 図 版



第2次調査 調査前風景（南から）



第3次調査 調査前風景（南から）

写真図版2

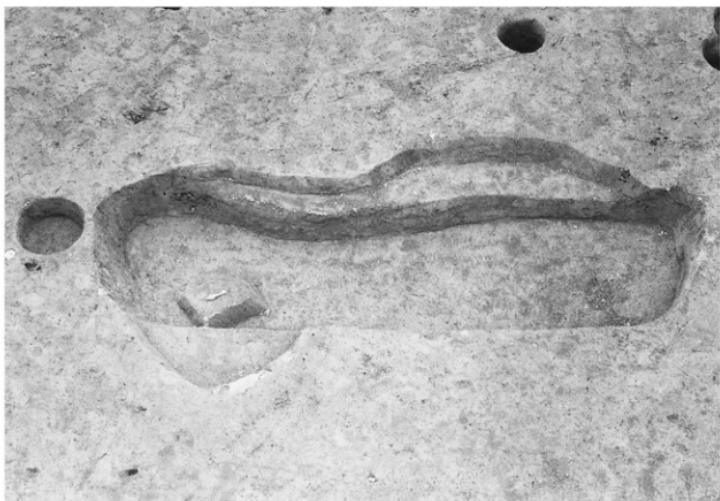


第2次調査区全景（西から）



第3次調査区全景（南から）

写真図版 3

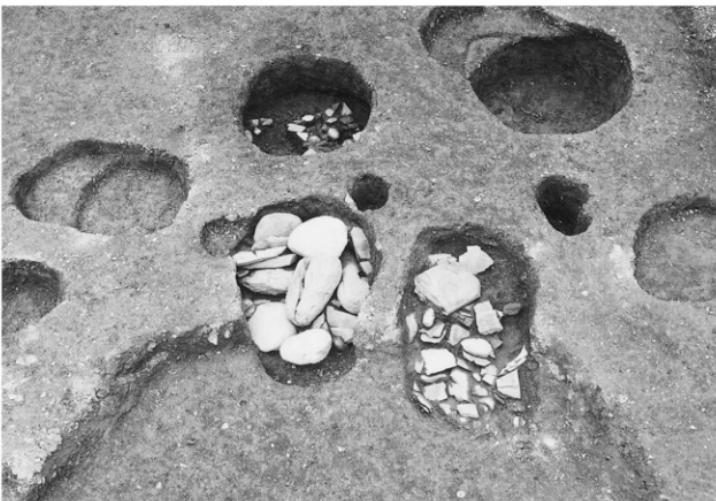


SK15（北西から）



SK13（東から）

写真図版 4



SK27~29（南から）



SK27（南西から）



SK28（西から）

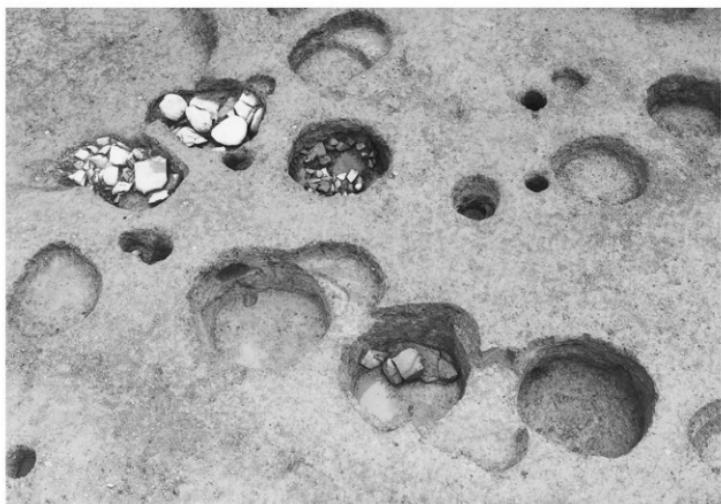


SK29（東から）

写真図版 6



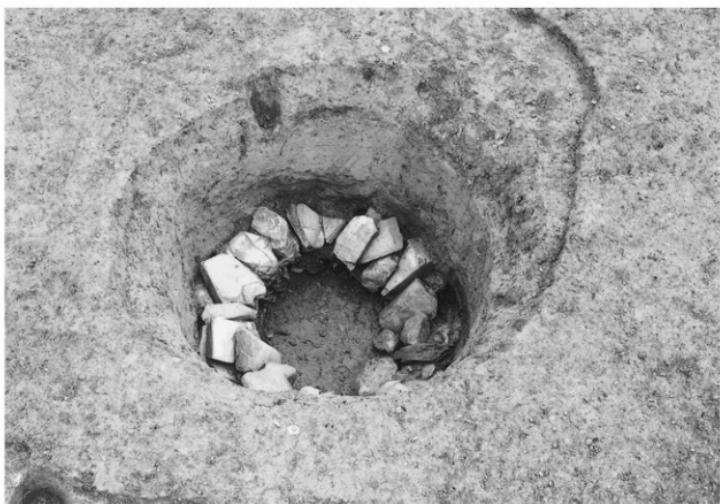
調査区中央土坑群（北西から）



調査区中央土坑群（北東から）



SK 35 (北から)



SE 34 (北から)

写真図版8



調査作業風景



調査成果説明会風景

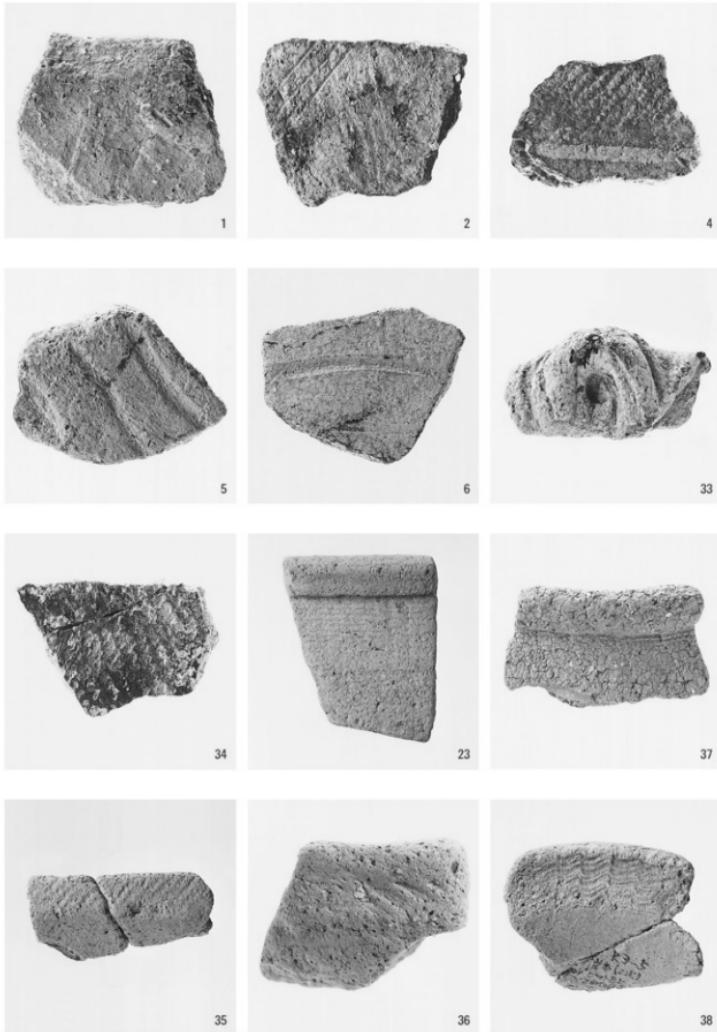


工事中風景（南から）



工事中風景（北から）

写真図版10

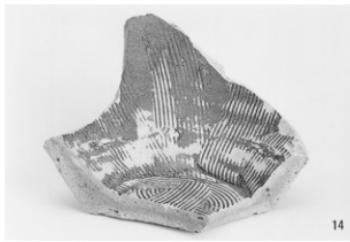
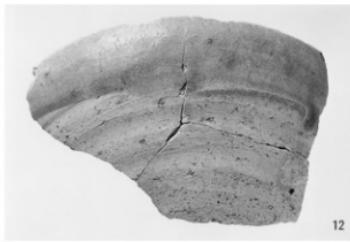
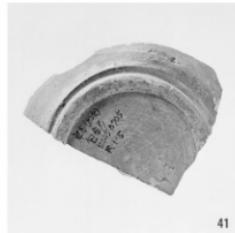
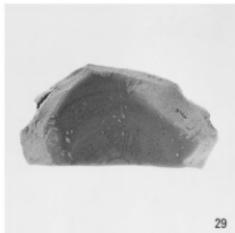


出土遺物（1）



出土遺物（2）

写真図版12



出土遺物（3）

報 告 書 抄 錄

三重県埋蔵文化財調査報告294

岸本遺跡（第2・3次）発掘調査報告

－三重県松阪市飯高町森所在－

2008（平成20）年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 光出版印刷株式会社

附図 調査区全図（1:200）、土層断面図（縦1:100、横1:200）

『岸本遺跡（第2・3次）発掘調査報告』

—三重県松阪市飯高町森所在—

2008（平成20）年3月

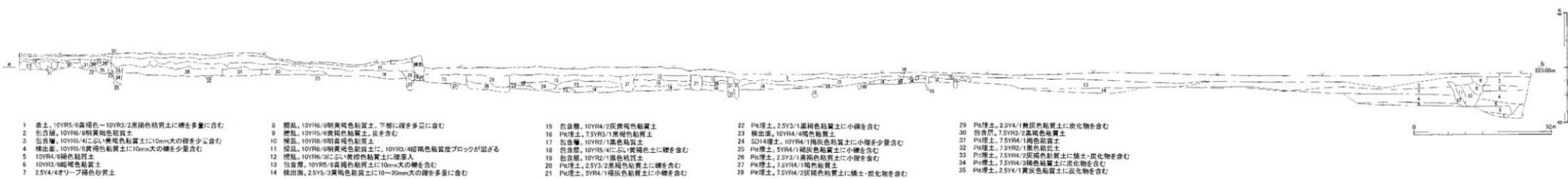
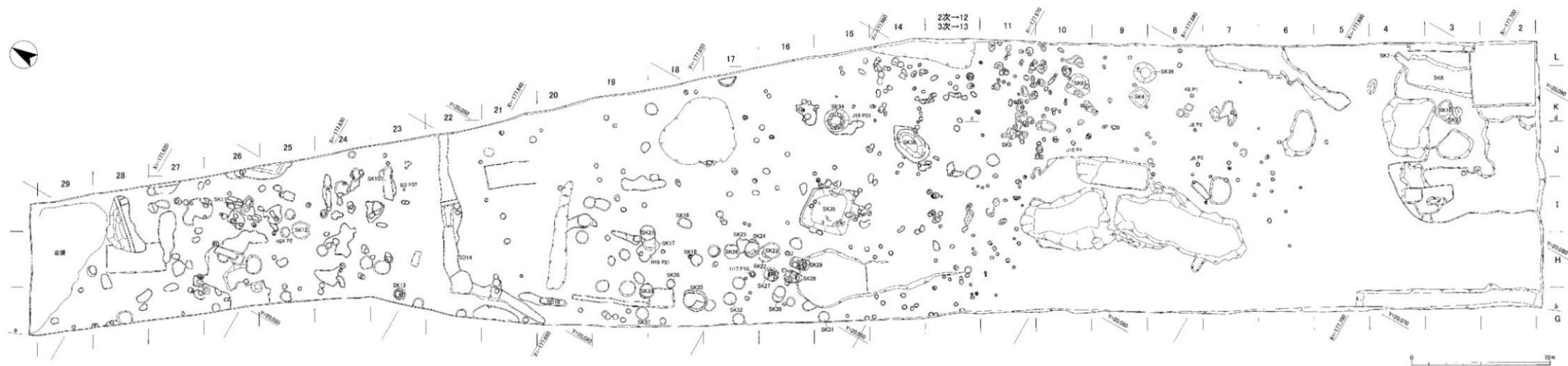
三重県埋蔵文化財センター

附図 調査区全図（1:200）、土層断面図（縦1:100、横1:200）

『岸本遺跡（第2・3次）発掘調査報告』

—三重県松阪市飯高町森所在—

2008（平成20）年3月
三重県埋蔵文化財センター



1 土木, 10YR5/6黄褐色～10YR2/2黒褐色粘質土に礫を多量に含む
2 粘土層, 10YR5/4明黄色粘質土
3 粘土層, 10YR5/4(シル)黄褐色粘質土に10mm大の礫を少々含む
4 粘土層, 10YR5/6黄褐色粘質土に10mm大の礫を少々含む
5 10YR4/6褐色粘質土
6 10YR3/8褐色粘質土
7 2SY4/4オリーブ褐色砂質土

8 砂質, 10YR6/0明黄色粘質土, 下部に礫を多量に含む
9 砂質, 10YR5/4黄褐色粘質土, 砂を含む
10 砂質, 10YR6/0明黄色粘質土
11 砂質, 10YR6/0明黄色粘質土に, 10YR3/4絆褐色粘質度ブロックが混ざる
12 砂質, 10YR6/0(シル)黄褐色粘質土に礫を含む
13 砂質, 10YR6/0(シル)黄褐色粘質土に10mm大の礫を含む
14 砂出面, 2SY4/3黄褐色粘質土に10~20mm大の礫を多量に含む

15 黄色層, 10YR4/2灰褐色粘質土に小礫を含む
16 Pd3土, 7SYR2/1黒褐色粘質土
17 包含層, 10YR2/1褐色粘質土
18 包含層, 10YR5/4(シル)黄褐色粘質土に礫を含む
19 包含層, 10YR2/1褐色粘質土
20 Pd3土, 2SY3/2黒褐色粘質土に礫を含む
21 Pd3土, 2SY4/1褐色粘質土に小礫を含む

22 Pd3土, 2SY4/1黄褐色粘質土に炭化物を含む
23 砂出面, 10YR4/4黒褐色粘質土
24 SD14層, 10YR4/1褐色粘質土に小礫を少量含む
25 Pd3土, 2SYR4/1褐色粘質土
26 Pd3土, 2SYR2/1褐色粘質土
27 Pd3土, 2SYR4/1褐色粘質土に礫を含む
28 Pd3土, 2SY4/2灰褐色粘質土に炭化物を含む
29 Pd3土, 2SY4/1黄褐色粘質土に炭化物を含む
30 包含層, 7SYR2/2黒褐色粘質土
31 Pd3土, 7SYR4/1褐色粘質土
32 Pd3土, 7SYR2/1褐色粘質土
33 Pd3土, 7SYR4/1褐色粘質土に礫を含む
34 Pd3土, 7SYR4/3褐色粘質土に炭化物を含む
35 Pd3土, 7SYR4/1黄褐色粘質土に炭化物を含む

附図 調査区全図 (1:200)、土層断面図 (縦1:100、横1:200)

